

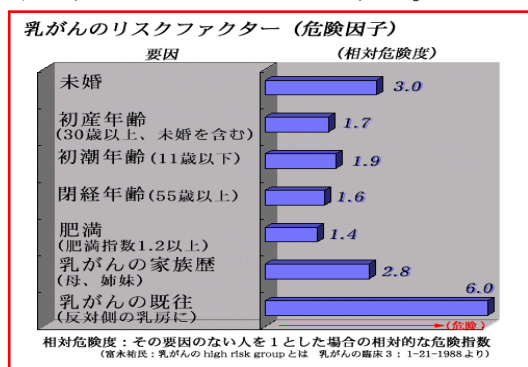
乳がんの早期発見を

放射線科 医療技師主査 桂 孝英

近年、乳がんの話題がメディアを賑わせ、みなさまの乳がんに対する知識も豊富になり、乳房の自己触診や2年(もしくは1年)に1回の乳がん検診の受診を心掛けている方も多くなった事を非常に嬉しく感じております。

では、なぜ乳がんが話題となっているのか?ですが、欧米における乳がん死亡者数が軒並み減少している中、日本では未だ増加の一途を辿っている事が挙げられます。

その原因は、ライフスタイルの欧米化による高脂肪食の摂取、少子化による生涯月経回数が増加等さまざまですが(図1)、最大の要素は乳がん検診受診率の低迷ではないでしょうか。



(図1. 乳がんの危険因子)

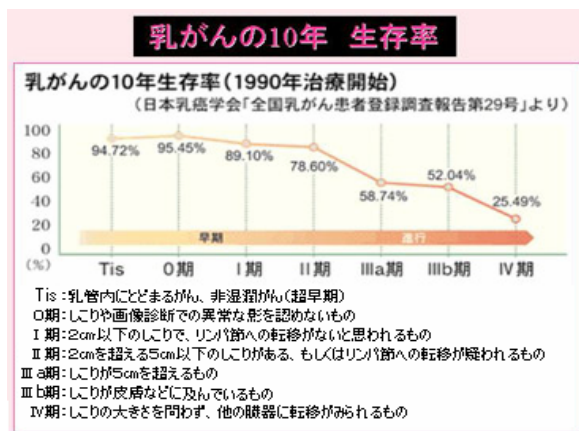
さて、乳がんからの救命を目的とする乳がん検診の歴史は長く、視触診のみに早期乳がん発見を委ねなければならない時代から、現在ではマンモグラフィ検査と視触診の併用検診に置換さ

れ、さらに充実した時代と言えます。

日本においてもその有効性が期待され、「50歳以上では死亡率減少効果を示す十分な根拠がある。一方、40歳代については死亡率減少効果を示す相応の根拠がある。」と報告されております。その理由として、マンモグラフィ検査は自己触診や視触診で発見しにくい微小な早期乳がん(図2)を発見する事が可能で、10年生存率(図3)の良好な早期段階での治療を実現、結果として死亡率の減少に寄与する為です。



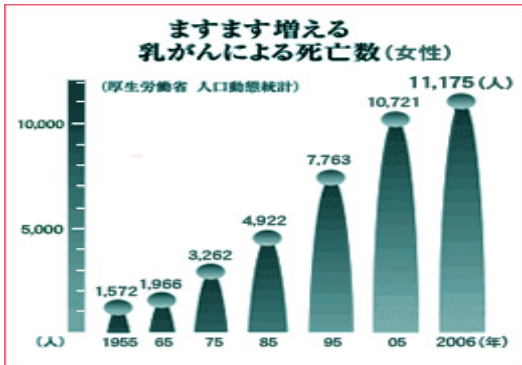
(図2. 触知不能の早期乳がん(左)と触知可能であるが既に進行した乳がん(右))



(図3. 病期による生存率の差)

欧米におけるマンモグラフィ併用検診の受診率は非常に高く、アメリカでは60%以上にのぼり、その成果により死亡率は年1%の割合で減り続けている一方、わが国における乳がん患者数は年間35,000人超、生涯乳がん患者数は20人に1人、乳がん死亡者数は年間1万人超(図4)と増加の一途を辿る厳しい現実の中、未だ約11%(茅ヶ崎市12%弱)の低受診率となっております。

その低受診率の原因には我が国とアメリカでの検診体制の差異が大きい事が挙げられますが、マンモグラフィ検査に対する不安も無視できません。



(図4. 乳がんによる死亡者数の推移)

次に、マンモグラフィと検査の説明をします(図5)



(図5. マンモグラフィ撮影)

軟部組織の描出に適した弱いX線を使用している為、被ばくも少ない検査

です。普通に生活をしていても自然に被ばくしているのですが、1年間に平均的に日本人が被ばくする量の5分の1程度、又は東京～ニューヨークへ飛行機で行くときの片道分程度に浴びる被ばく量とされています。

- ・上半身脱衣する理由：塵・毛髪も描出する高画質であり、衣類が妨げになる為です。
- ・乳房を圧迫する理由：乳腺に隠れた病変を確実に捕える為です。(圧迫は撮影直前より撮影までの5～10秒程度)
- ・両側の乳房を撮影する理由：乳腺の分布には個人差があり、反対側の乳房画像で比較する為です。
- ・場合により追加撮影を行う理由：2方向で乳房全域を網羅できない事がある為です。

検査の概要が少しお解かりいただけたでしょうか？

一瞬ではありますが圧迫される痛みと、乳がん描出の妨げになる衣類の脱衣がございますが、2年(もしくは1年)に1回、10分程度の検査で発見できる乳がんが日本にはまだまだ潜んでおりますので、今後さらにみなさまが乳腺外来やマンモグラフィ併用検診を受診される事を願っています。

また、40歳以上2年に1回と限られた検診が、ご自身の適時な受診とならず心配なさっている方は、当院の外科診療、木曜日の乳腺外来や人間ドックのオプション検査もご利用下さい。

1人でも多くの方のお役に立てるよう、みなさまのパートナーとしてお待ちしております。ご質問等にも放射線科までお気軽にいらして下さい。

乳がん撲滅を目指す一医療技師より